

片倉もとこ氏の講演

【廣 田】 片倉先生、次をお願いいたします。ボードを使われますか。

【片 倉】 はい。何時ぐらいまでいいんでしょうか。なるべく映像を見ていただければと思います。その方がメインです。

尾本先生が東大から日文研に移って趣味を全開したという楽しいお話をしてくださったのですが、私は、もう初めからほとんど専門がないような感じで、趣味ばかりで生きているような人間でございます。理学部2号館に8年ぐらいいたときも、ほとんどは外国に出ておりました。籍だけは東大に置いておりましたんですが、あのころは地理学が専門ということ

【尾 本】 あ、そうでしたね、私もいた理学部2号館にいらっしやった。

【片 倉】 はい。あそこで学位をいただく寸前ぐらいに、ICUから、文化人類学の講義をせよと言われて、いや、私は文化人類学じゃありませんと言ったんですが、あなたは民族学会で賞の候補に上がっていますし、、、とか、言っただいて、お引き受けいたしました。初めて教壇にたったのが、キリスト教大学だったということです。そのころは、文化地理学概論とか、遊牧民のフィールドワークについての講義などを、外国人の学生もまじったICUで担当していました。いつのまにか、「片倉さんの専門はイスラーム」というようなことになっているらしいんですけども。幼いときから、めずらしいもの、異なったものに対する興味があって、はまりやすいたちでした。イスラームというまったく知らなかった世界にも、はまりまして、勉強した結果を本に書きましたら思いのほか沢山のかたが読んでくださいました。

どういう種類の研究会でも研究会がなにより好きで、趣味の一つは研究会なのかもしれません。話をしなくていい、聞かせていただくだけの研究会が一番いいのですが。(笑)今回は廣田先生にお声をかけていただいて、とてもうれしくて昨日から出かけて参りました。どのくらい貢献できるかどうかでございしますが、皆さんの御指導をいただきながらということで、。。。。

パワーポイントはつい最近やり始めまして、これまた、はまっているのですが、いたずらしていると、こんな雲ができちゃったんです。ソフトにはないのに、どうして出てきたのか、そこが機械のおもしろいところかなと思って(笑)、この雲も、内容を示唆しているところ

もあるので、わるくないなとそのままに頂戴いたしました。

つい先日まで日文研の海外シンポジウムに出席するため、エジプトにおりました。カイロでメールを見ましたら、葉山では講演せよとかいてある。ただ、気楽におしゃべりをすればいいんだと思っていましたので、これは大変だと大急ぎで用意いたしました。進化主義という大変チャレンジなおもしろい題をいただいているわけですが、進化主義というのをどういうふうに考えていいのか、私なりに考えてみました。

進化とは何か、大ざっぱに言いますと、2つに分けて考えられるんじゃないかと思います。生物的な進化と、それから社会的な進化というんですか、先ほど、長倉先生が人の生物としての進歩と、それから社会的な存在としてという話をしてくださいました。

進化というと、ダーウィンを思い出すわけで、社会的な進化論は、ダーウィンから影響を受けて出てきたのだろうと一般に考えられている向きもなくはないのですけれども、歴史を見ても、最初に出てきたのが社会進化論の方です。これが19世紀の後半ですが、既に18世紀の啓蒙主義の間から文化進歩主義というふうな、文化進歩主義というものが出てきております。19世紀、それから19世紀の後半ぐらいになりまして、ダーウィンが、その社会進化論の影響を受けるというか、その波に乗って生物学的な、いわゆるダーウィンの進化論を出してきたということのようです。

文化人類学的にもうしますと、文化人類学の祖先といいますか、御先祖様というふうに言われているイギリスのタイラーが、この人は文明も文化も区別しないで、一緒くたにして論じています。先ほど長倉先生からですが、文明をどう定義するかが問題だというお話ができました。確かに文明をどう定義するかは大変問題で、学者の数ほど文明の定義も、それから文化の定義もあるというふうに言われています。ここではちょっとその話は置くことにいたします。

一般に言われている文化・文明という言葉は19世紀後半に出てきました。このころタイラーが、人間の社会は原始社会から、だんだん高等なもの、上等なものになっていくんだという大変わかりやすい進化論を出したわけです。現在、後進国と言われているものは、人間の昔の姿であるのだというふうな、そういうふうなことを言った。この御先祖様のお力は大きく、その流れがずうっと続いていたのです。しかしそうではないという考え方がでてきました。20世紀後半に入りまして、いわゆる相対主義といわれるものです。どの文化も価値としては同じ存在である。あれは上等の文化でこちらは下等の文化だなんていうようなことを言うことはできないというふうな流れが中心になりまして、それが文化人類学の中心課題

になったわけです。うんと最近になって、アメリカなどでは、やっぱり相対主義は間違いで、やはり絶対的な何かというものがあるんだというふうなことを言い出す学者が出てきていることもあります。このことにも、ここでは触れないでおきたいと思います。

進化主義のこの「主義」というのは何かというのを考えてみました。「主義」というときには、これはやっぱり何々そうせねばならないとか、こうすべきであるとかというふうなものが入ってきたときに、「主義」になるのではないかということがあります。こういうふうな進化をすべきであるとしたときに、それが進化主義といわれるものになるのだろうと思われれます。普遍主義とつながっていきます。

何々すべきとか、何とか主義ということになりますと、生物学的にいつても33億年前は一つの単純なものだったのが、大変に多様な種に分かれているわけですが、そういう事実逆行するかのように、多様なものを一つにまとめて、これこそが人間世界を、全地球人を幸せにするんだというふうに言うことになってしまいます。

それを普遍主義と言っていいのではないかと思うのですが、これが昨今しきりに問題にされるグローバリズムというものでしょう。現在のグローバリズムは、手っ取り早く言いますと、欧米的なもの、特にアメリカ的なもの、たとえばアメリカ的な民主主義こそが、全部の地球人、地球全体が幸せになる方法なのだというふうにいうのがグローバリズムで、これはグローバリゼーションとは区別して考えていかなくちゃいけないだろうと思うんですね。

グローバリゼーションについては、後で触れたいと思いますが、グローバリズムは、地球の上に白いシーツをぼんとかけて、そしてアイロンをかけていくような、日本が一番コンクリートが多いんだそうですけれども、世界中にコンクリートを敷いて、すべて画一的になるというようなそういう状況、それをグローバリズムと呼んでいいんじゃないかと思うんです。

進化主義の後に来るものを考えてみました。結論からさきにもうしあげさせていただきますと、「多花主義」というわたしの勝手な造語であらわされるものです。すでに人類社会のはじめのほうから、そのうごきはあったというふうと考えられるんです。

進化というものは、時間の軸によってどんどん変化していくもので、結果的には、どんどん分かれていく、細かく分化していくのが実態であります。いわゆる進化主義では、だんだんよいほうに進んでいく筈だ、ひとつのいい方向に進むべきだということでしょう。はたしてそうかが、いまとわれているようです。そういう意味の一本化された進化ではなくて、多様化、分化ではないか。

ごく最近になって、「多様」ということに、注目があつまっているようです。文化庁では、文化の多様性に関するシンポジウムが毎年ひらかれています。河合隼雄さんなんかは何年か前から、あの方が就任なさってからかな、3～4年前からやっつけらっしゃいますが、多種多様性ということが大変重要視されています。異なったものを、多様なものを大事にするという考えかたです。

この文化の多様性を肯定した上で、わたしは、勝手な言葉をつくりだしました。皆さんの御批判を得たいと思っているんですが、これを「多花（たか）性」というふうに呼んでみたいとおもうのです。ひとつひとつの文化、考え方に価値をみつけないという意味合いをこめています。

たくさんのお花、いろいろなものが出てくる。私たちがみなれたもの、あるいはみしらぬもの、そういうふうなものが、どんどん入ってきて咲き出しているのが現在の状況ではないかと思われまして、その中には、明治以降に、どっと押し寄せました西洋文明のように大輪の花を咲かせているものもあるのですが、路傍で咲いているような小さな見慣れない地味な花もあります。

日本は、このところ日本の中のある種の普遍主義といいますか、一つにまとまっていきたい、一つの考えでいきたい、日本を愛しましょうとか、そういう傾向が出てきているようなのです。これは、よその国を排斥しましょう、という心情につながったり、地球全体を愛しましょうというようなことには否定的になるおそれもあります。

そもそも、ひとつの純粋な日本とか、一筋につづいている伝統日本というようなものが存在するかどうか、純粋への憧れは、どの人間の心理のなかにもおもえますが。後ほど画像で見ていただきたいと思うのですが、さまざまなものが、日本の中に入ってきています。縄文時代から、もう既にいろいろなものが日本には、はいりこんでいて、日本の文明を見ていると世界中の文明がわかる という人もいます。いろいろなところからいろいろなものが入り込んできているのが日本列島であるというふうに、これは尾本先生も日文研で講演していただきましたが、一緒に講演して下さった佐々木高明先生なども指摘されています。

20世紀は、交通・通信革命の時代でしたから、20世紀には、ことさら、多種多様なものが日本列島に入りこんできています。しかし鎖国時代の江戸時代でさえ、近松門左衛門の中にでも、今風に言えば国際結婚みたいなものが出ているんですね。「国性爺合戦」のあの

和唐内（わとうない）も、和人と唐人のあいだに生まれた「あいのこ」ということになっています。最近「あいのこ」とは言わないでダブルと言うんだそうです。あいのことかハーフという、日本人の血が半分しか入っていないというような否定的な意味合いになるので、ダブルといえる豊かな存在であるということを肯定的に示したいというわけです。

いずれにしても、日本のみならず世界中で、たくさんのものがまじりあう時代になっています。しかし、一方では、ひとつのもの、ひとつの考え方、これこそが一番いいのだということが主張される傾向もでてきています。

明治政府が言ったように、西の方にある西洋の文明・文化は世界で一番すばらしいんだ、こちらの方でやりましょうとか、あるいは、日本の古来からのこれはすばらしいんだ、これだけでというふうな、「一つの花主義」といいますか、「単花主義」というのは、いつの時代にも出てきています。ある種の純粋主義です。純粋というのは、私なんかでも何となくあこがれをもってしまうようなところがありますが。

それが進化主義と結びついて、純粋なまま、それがずうっとつづく、これが人間のある姿で、こういうふうに一筋に進んでいくんだといわれると、ああ、なるほどと、簡単に合点されて、みんながついていくという感じがあるのです。それでいいのか。そうであってはまずいんじゃないか。

純粋日本はこうであるべきだという風潮がでてくると、不純とおもわれるものが排除される。不純なものはなるべく日本に来てもらっては困るとか、不純物を除去するとかという現象がでてきます。

生物学的にいても全くの純粋物は役に立たないという話をこういう研究会で聞きました。不純物が混じることによって強くなるということです。社会状況においても同じようなことがいえそうです。

「一つ主義」というふうなものから脱皮して、たくさんの花がそれぞれに楽しく咲いている世界へというような、こんなことを考えてみました。それが進化主義の後に来るのかどうかよくわかりませんが、「あらまほしき」というふうな感じで考えてみました。

残された時間、5分ほどで画像を見ていただこうと思います。

画像

これは、御存じの方もおられると思いますが、新宿界限です。この映像を見ていただければお分かりくださると思いますが、種々雑多な文化が、いりまじっています。看板の文字だ

け見ていただいても、ハングルもあれば、ミャンマー語、タイ語、中国語、マレー語、もちろん、英語、独語、仏語など、いろいろな言葉がちらばっています。

私はレストランにいくと厨房に入るのが好きで入っていくんです。こういうことを平気でやるのが文化人類学者です。(笑) この厨房にはご覧のようにチュニジア人とモロッコ人の男性と女性がシェフとして働いていました。

店頭にはこんなにさまざまなものが、やまづみになっています。アジアのものが多いですが、よくみると、全世界からのものがみられます。

これは新宿京王線の調布駅です。イスラーム服をきたアラビア人です。実は私の友達なんですけど、日本でお産をしようとしています。だけども、日本の産科医は男性が多いので嫌だというんですね。女医さんのいる病院はないかというから、じゃあ私が探しましょうということになりました。私はエジプトでお産をしたんですけども、あちらでは、女医さんの数が多いのです。それが、女性の社会進出をうながしている面もあります。

日本で一緒に女医さんのいる病院へ行きました。そのときに駅でとった写真です。日本では多少みなれないこういうふうな人たちも、日本にとけこみ、日本で子供を産んで生活をしているのです。

これも日本です。普通の日本とは違う雰囲気だと思いでしょが、こういうふうなものが入り込んでいる。異国、外国のようにみえるでしょうが、これも日本なんですね。これもみんな日本です。フランスの田舎という雰囲気でしょう。

これは、国際結婚の宴なのですが、向こう側は私の学生だった日本人ですが、こちら側はカナダ国籍の男性です。彼はイラン人です。イランはイスラームというふうに、一般に思われていますが、イスラームのほかにバハイ教という宗教もあります。彼はバハイ教徒なんですね。ですから、バハイ教の結婚式を日本で日本の女性とあげて、この写真はそのあとの披露宴でのものです。彼らの友人たちのアメリカ人、アフリカ人、アジア人さまざまな国籍の人があつまっていました。

今は2人で仲よくカナダで生活してまして、時々メールを送ってくれたりします。物理的

には離れていても、メールその他の技術で、人間が地球規模で交わるようになっていまして、はご存知の通りです。

これは、日本人とコロンビア人の結婚式で、ナイジェリア人が介添えしています。周りを取り囲んだひとたちは、やはり世界中のひとたちでした。

日本にもイスラムセンターがあって、イスラム教徒の結婚に必要な書類がそなえられています。イスラムでは、神様の前に永遠の愛を誓うというような嘘っぱち？や建前的なことはいわない。今は愛してるけど、どうなるかわからへんというようなところもあってですね、(笑) イスラムは人のこころも、からだもうつろうということを、あっさり認めているところがあるのです。仏教に似た感じもあります。

結婚は人間同士の契約とされています。離婚すると損するのはだいたい女性ですから、女性に払う代償もはじめから決めておくのです。日本でも、男の人が女の人に払う結納というものがありますが、イスラムでは、前払いの結納と後払いの結納がありまして、結婚するときには前払いの分を渡す、離婚するときには、後払いの分をわたすのです。それを、契約書にはじめから書いておくのです。離婚保険が女性にはついているわけです。

これはカナダのイスラムセンターにある契約書です。イスラム世界の人たちは、「インシャーアッラー、神様のおぼしめしがあれば」と約束の後に、だれでも、つけくわえます。ハーバード大学や、オックスフォード大学のイスラム教徒もそう言うので、わたしのなかにも偏見のあった時代には驚きました。

約束を守らないとか、守るつもりがないというわけではなくて、たとえ人間がきちんと約束しても、途中で交通事故に遭うということもありうる。約束した日に病気になるということもある、人間の意志だけでは、どう仕様もないことを、勘定に入れておくのです。それで、イスラムを知らないひとたちには、いいかげんだなあ、という印象を与えることもあります。わたしも、付き合いはじめは、なんとなく不安でした。

しかし、結婚とか大事なビジネスになると、これは人間どうして、きちんとしてやらないかということになる。日本のビジネスマンなんかは、「ふだんはいいかげんなのに、ビジネスになるとひどくきっちり契約を守られるので、かなわん」と怒る人もおおいのです。

そこが日本とは反対なんです。

日本人のインテリ青年層のあいだでイスラーム教徒になる人が増加しているのですが、外からはいつてくるイスラーム教徒の人たちもいて、日本にもモスクが沢山つくられています。

この写真にも、日本人ではない人が何人かいるのがおわかりになると思うんですが。幼稚園にも、外国からのいろいろな人たちが入ってきているんですね、日本のほかにも。私の友人の子供が小学校に入学した。「クラスにアンジェリカちゃんという女の子がいたよ」ってお父さんにいった。おとうさんは、その女の子、どこの人ってきいた。あした聞いてくるって言って翌日帰ってきて、アンジェリカという女の子に「なにじんなん？」って聞いたら「わたし日本人」って言ったって言うんですね。(笑)

これは神戸のモスクでの日曜学校です。日曜学校というと、キリスト教のおもものですが。イスラームでは金曜日がお休みの日なんですけど、日本に来ると金曜日もワーキングデーになっているので、日曜日にモスクに父兄が子どもをモスクにつれてくる。日本人の子供も沢山まじっています。大学院のころ、わたしの学生で、いまは大学の講師をしたり、わたしの研究助手をしてくれている河田尚子さんという人がいるのですが、彼女はイスラーム教徒になり、この「日曜学校」で教えています。

これは日本人の子供たちがお祈りをした後ではしゃいでいるところです。

これも日本人だと思いになるでしょう、これはインドネシア人なんです。このくらい、日本人もインドネシア人も違わなくなっているということです。

これは、皆さんもおそらくよく御存じの場所だろうと思いますが、昔こういうモスクがありました。代々木上原のところに昔あったトルコ系のイスラム寺院です。これが老朽化してしまいまして、今新しく建てかわったのがこれです。小田急線から見えるところにあります。高級住宅街なんですよ、そこに雪が降ると、こんなふうに美しい景色になります。これは新宿の高層ビルと一緒にとったモスクの写真です。

というわけで、この小さな日本列島にもさまざまな人、もの、ひっくるめて文化が入ってきて、たくさんの花が咲いているということなのです。

しかし、異なったものへの排除とか反発というのものなくはありません。それは、仏教が日本に入ってきたときも御存じのようにありましたし、キリスト教は先進地域からということで、はじめはなかったのですが、力を持ち始めると脅威をとされて、弾圧されました。

確証バイアスというものが、心理学でいわれるのですが、人間は一旦こうだと思い込むと、なかなかそれから脱出できない。例えばイスラームはテロだと、思い込む。あるいは、あの人たちは悪い人なんだとか、思い込ませられたりすると、それがそうではないという実証を、さんざん見せられても聞かせられても、もう、確証バイアスとして深く沈んでしまうというのです。

京都大学の社会学の教授が、「日本は離婚が多い国であります」という文をお書きになったら、日本はそんなことはないとさんざん言い合った人がいるそうで、それにたいして、ひとつひとつ例証を挙げて説明したが、最後までわかっていただけなかった。それは、わからなかったというのではなくて、その人は、日本はそんな国ではない。離婚なんかはそうあるわけがない、という確証バイアスが入り込んでしまっていて、幾ら後からそういうふうに言われても、なかなかそれを覆すことはできないという、こういう何か厄介なバリアがあるということのようなんです。

あと1分ほどで終わります。最初にちょっと申し上げたグローバリズムなんですけど、グローバリズムは、地球に画一的な社会をつくっていく。一言で言えばのっぺらぼうの地球社会をつくってしまう可能性があるのですが、グローバリゼーションの方は、たくさんの花があちこちに種を飛ばし、理想的にいけばモザイク模様の芸術的な地球をつくっていく可能性を秘めているといえるのではないのでしょうか。

20世紀の通信革命、交通・通信革命を経て昔のように民族大移動ではなく、個人個人が気軽に国境をこえることができるようになった。自分が生れた社会でその大多数の文化に従って生きていかななくてはならないというのではない。自分の文化を選ぶことができる時代に我々は入ってきているのではないかとおもうのです。自分の好きな花をつんで自分らしく花を咲かせて生きていくという、そういう時代になってきているんじゃないかと、そんなふうに進化主義の後継を希望的に考えているのです。

片倉もとこ氏の講演についての討議

【廣 田】 ありがとうございました。(拍手) 質問がございましたら、

【高 畑】 先生は、あえて進歩主義と書かずに、進化主義というふうに書かれたのでしょうか。

【片 倉】 進歩って書いてありましたっけ。ごめんなさい。それは間違い。まだ時差ぼけなのかなあ。進歩と進化は違いますねえ。進化主義、、、

【高 畑】 いえ進歩主義です。

【片 倉】 進歩?…ずうっと進化だとおもいこんでいました。

【高 畑】 いえ、いえ、先生は進化というふうに書いておられますので。

【片 倉】 これは進化主義でしょう。

【高 畑】 スライドでは進化主義でしたので。

【片 倉】 ああ、私、すっかり間違えてた。

そうか、進化じゃなかったのか。進化主義と思い込んでしまったんだ。ごめんなさい。ダーウィンなんか出さなくてよかったのですね。そうですか、進歩主義ね。進歩主義と進化主義は違いますよね。

【廣 田】 ぜひ先生に、一言では難しいでしょうけど、ちょっと応じていただければ、先生の率直なお考えを。

【片 倉】 進歩主義ということになると、私なんかは運動会の軍艦マーチなどを連想してしまいます。前進、前進!進歩、進歩、前に行くのがいいというのがありますね。進歩の反対、退歩、後ずさりするというのも戦略として、けっこう上等ではないかとも思うのですが。きょうは、ちょっとそちらの方は考えていなかった。進化主義だとばかり思い込んでいました。すいません。

【海 部】 いろいろちょっと、僕、新しい概念が幾つかあって、大変おもしろかったんですが、グローバリズムの話をなさってですね、その中で、単素主義、グローバリズムというのは単素主義につながる。それで、まあ、私、この場合は進化主義でも進歩主義でも話としては同じ流れになると思うんですが、そういうものがその進歩主義なり進化主義から生れてくるという、そういう、何ていいますかね、合意というか、そういうものがやはりあるわけでしょうか。

【片 倉】 しらずしらずの暗黙の合意が、まかりとおっているのではないですか。

【海 部】 つまり、進歩主義、進化主義が進んでいくと、つまり今の世の中というのは両方あります、今の流れとして。今お話しになった中で、多様化という話です。で、その多様化は間違いなく進んでおりますと。それから、例えば男性・女性の問題でいえば、今いろいろ議論がたくさんありますけれど、とにかく女性のいろんな意味の権利が進んでいる、全然進んでいる、これは間違いのないわけです。余計なことを言うと、私、女房といつも議論をすると、必ず最後に、私は世の中はよくなっていると女房は言うんですよ。なぜかという、女性にとっちゃよくなっているわよって言われるとね、それは全くそのとおりでしょう。ですから、そういう視点の違いというのがあるというのはよく感じるんですが、いずれにせよ、そういうことも含めて、多様化なり、あるいは進んでいるという面と、一方で、今おっしゃったように、その逆に単素主義、純化主義というものがね、生まれてきて、それがやっぱり僕らいろいろ心配をしている面があるのも確かで。というのはですね、その単素主義なり純化主義なりというものは、その進歩主義、進化主義というものから生れるものなんですね。ちょっとそここのところは、実はよくわからない。

【片 倉】 やっぱりね、進歩とか進化というやっぱり、ひとつに狙いを定めて前に進むというような感じと結びつきますよね。前進するというとき、あちこちには歩いていけない。一つの方向に、突き進む。それで、それはやっぱり強いんですよ、ある種の強さですね。

【海 部】 それは簡単だからです。

【片 倉】 そうですね。たくさんあるのは、ややこしいですものね。男は男、女は女で、固定して決まっているという方が簡単ですよ。だけど、女にもいろいろあるし、男にもいろいろあるし、、、、男と女は全く同じだというような主張も一時出ていました。いわゆるフェミニズムはそうです。だけど、先生の奥様がおっしゃったのはやっぱり正しくて…正しいというか、一人ひとりにとって、やっぱりよりよく、快くなる世界というのがあるのでしょうか。それは多様であることを認めるということともつながっているのではないのでしょうか。

【海 部】 つまり進歩主義とか、そういうこととどう結びつけるか、私は、この概念がやっぱりまだ、いろいろ多様だと思うから難しいとは思いますが、確かにその、例えばその能力、産業活用等も、もう一色の、それこそばあっと売れているんですね。そういうことをやるというのは、これは全体をいわば大きく壊そうと思うと一番単純な。

【片 倉】 そういうことですね。

【海 部】 今のお話を伺っていて、やっぱり今、世の中に感じるそういう単一化というのは、何かそういう傾向と軌を一にしているのかなということでは何となく感じますね。

【片 倉】 その方が、先ほど先生がおっしゃった産業活動と結びつきやすいですね。商品価値をつくるころには、やっぱり同じものを、つけた方が効率がいいしという、そういうふうなこと等も結びついて、放っておくと一つ主義、単素主義になるんじゃないかと思えますね。多少の努力をしないと、違ったものに接近できない。違ったものを愛でてみようというふうにはならないですね。

【小 平】 ですから、生物の共生もそうですけれど、美しいわけじゃなくてですね、ものすごい熾烈な生存競争の中で一緒に暮らしているというイメージでないと、とてもだめだろうと思います。

それからもう一つは、先生がダブルというふうにおっしゃいました。うちの子供なんかものすごいじめに遭いまして、みんなからハーフ、ハーフと言われるのを、うちではおまえはダブルだよと、こう言うわけですが。何でダブルと言えるかということ、僕は日本の水を飲んで子供時代を育てて日本人なんですね。家内はドイツでドイツの水を飲んで幼少時代を過ごしてドイツ人になって、脳の中もドイツ語が、ドイツ語の中にとすっきり頭がする。僕も日本人が話している中にいると頭がすっきりする。そういう日本という固有のやっぱり文化圏があり、ドイツという文化圏があるからダブルになれるんですね。もし世界中が混ざっちゃったら、これは多様な画一になってしまうわけで、やっぱりその地域文化というか、そういう子供の時代に水を飲んで育つ、体ができるときにいたふるさとというものがあるからダブルと言えるんだということを日ごろ強く感じています。

最近、天文学者として、海部さん言われたように、太陽系以外にいっぱいその惑星が見つかってきているんですけど、その比較惑星論とかですね、そうすると、その惑星にもし文明が生じたら、生物が発生したらどうなるだろうかというような論文も最近は出ているわけですけど、そうすると不思議なことに、不思議というか、惑星の定義からして丸いんですね。それで、しかもこれが真ん中にある太陽みたいな天然の原子炉から熱をもらって、水は宇宙にたくさんありますから、海があるとそれは生命現象があるんでしょうけど、丸いためにですね、どうしてもその惑星の上には地域性ができるんですよ。日の当たりぐあいとかということによって、地軸が傾いていればさらに四季が出たりとか、そうでないところ、それから上に大陸があって、海洋があって、生物、多様な生物が発生するんですけど。ですから、必ずその生命が発生している惑星という中には非常に地域性があるんですね、その地域地域でやはり刷り込みをされて育ってきた個体の集合がどこかに地域的にあるからその文化というものがあって、おまえはダブルだよ、だからクォーター、4倍のクワダブルだよと言って言

えるわけで、何かその、どんどん多様にただ空間的になればいいというわけでもないし、その多様になることには非常に熾烈な闘いがあるということはお認めをいただきたいと私は思います。

【片 倉】 ありがとうございます。いいコメントをいただいて。確かに、違ったものとの共生というのは、熾烈なのだとおもいます。それは日本人同士でも結構熾烈です。(笑) 私の叔父はドイツ人で、日本人で医者のお母と、まあ熾烈なところもあったけど、やっぱり仲よくしてましたね。間にできた子供はダブル、小平先生のところのお子さんは、本当に正真正銘のダブルですね。2つの文化を、両方から受け継いでおられるでしょう。小平先生のおっしゃるように、同じローカリティーを持った人と結婚したら、これはもうダブルじゃない。比較的にいえば、単純になる。それと関連して地域性ということですね、地域性ということで、我々は今まで随分縛られてきたんじゃないかと思うんですね。もともと人類はアフリカから移動して地球上に散らばったわけで、分布状態は人間が一番いい。広範囲に分布していますよね、ほかの動物に比べても、植物に比べても。人間が一番地域性を持たない。ホモ・モビリティとわたしは呼んでいるのですが。

アフリカのほうから、移動し、ばらまかれたわけで、そこに先ほどお話があった国家なんというふうなのが出てきたのはつい最近のことで、昔はビザだとかパスポートなんかなしでどこへでも行けたわけですね。国家というものができて、国家が自分の国だけを愛せよとかね、というようなことを言い出す、それは一つ主義といいますかね、そういうふうな傾向が、最近また出てきているんですけど。それがそういうふうなその単花主義とか一つへの回帰みたいなものは、もうDNAの中に組み込まれているかどうかは、私は否定的で、もともとは分化していくというDNAの方が多んじゃないかという、これはまたどなたか先生にお聞きしたいと思うんですけども。ですけど、その2つの争いみたいなものがあることは確かで、先生が熾烈という言葉でおっしゃったように、たくさんの花と喧嘩せずに一緒にやっていくのは、そう簡単なことではないですね。愛国心はほうっておいてもでてくるものですが、問題は、誰もがどこかで愛国心をもっている。自分が自尊心を持つと同様に相手にも自尊心がある。こっちの心を考えて、自分の心と同じように相手の心を考えてみるということは、そう簡単にはできないですけど、人間ならば可能であるという希望的観測に持っていきたいと思うんですけど。

【廣 田】 ありがとうございます。

[以下、二三の方々によるインフォーマルな討議であるが、貴重な情報交換なので収録する]

【小 平】 片倉先生のおっしゃる確証バイアスというのは、あれは広く先生の分野ではお使いなのではないでしょうか。

【片 倉】 あれはね、心理学の人から教えていただいたんですけど、心理学ではそういうのがあるらしいですね。一旦思い込むと、なかなかそれを覆すのは、個々の人間にとって難しい。

【小 平】 この前ですね、ある方の、フランスのモダニストについてのお話をやっぱりこういう場でいただいたときに、その方がモンテスキューだったかな、書いている、既にも中で、知識は人によって持っている人と持っていない人がいるけれども、けど分別だけはだれでも自分が持っていると思うという、何かそういう文章があつてですね、人は、自分の判断が間違っているとは決して言わないっていうんですね。

【片 倉】 そう、でもそれはもう絶対に抜きがたいというわけではないでしょうけれども。人間は、そういうふうな傾向を持ちがちだといいます。要するに人間というのは頑固になりやすいという、自分が、いったん思い込んだらもうそれで突っ走っちゃうという傾向があるということだろうと思います。

【小 平】 もしかしたら画一性へのあこがれみたいなものもそういう。

【片 倉】 あるかもしれませんね。

【小 平】 魚なんか群をなしますよね。水族館を見ると、もう何十という魚がうわっと、イワシなんか群をなして泳いでいて、結構みんなちゃんとぶつからないで泳いでいたり、皆何か…個体なんだけれど、すごく画一というのか、全体の中に組み込まれているような感じがして。

【片 倉】 そうでしょうね。でも、ああいう自然の中にモデルを見るのはむしろ間違いだと総研大の長谷川真理子さんなどは、おっしゃってますね。人間が勝手に、モデルを自然のなかにもとめる、特に日本人は自然信仰みたいなものが多いから、自然もこうだから人間もこうだと解釈する。動物のほかの生物の場合には、結婚なんてないから、人間の結婚制度もおかしいんだというような。

【小 平】 うん、制度はないけれども、一夫一婦制の動物はいますよね。

【片 倉】 そういう動物をみて、人間も一夫多妻制は不自然だとか、いやそれのほうが、自然なのだとか、自然になぞらえて、考える人もいますよ。

【小 平】 不自然かもしれないし。それは、ですから、でも、こんなふうになったのは、

【片 倉】 そうですよ。

【小 平】 2000年ぐらいかもしれない。

【片 倉】 そうですよ。もうほんと最近のことです。

【小 平】 今でも、そうでない文化圏がある。

【片 倉】 そうですよね。いや、日本だって事実上、実際はそうではないという人もいます。

【長 倉】 多花と多様とどう違うんですか。多花ということは非常に…「多花」という言葉をお使いになりましたが、大変美しい言葉で、多花と多様というのはどういうふうに。

【片 倉】 基本的にはそう違うわけではないのです。ただ、多様というのは、事実そうであると客観的にみえています。みんなそれぞれ違っているんだよと。だから、いさかきもおこるんだというふうに持っていくこともできる。多花のほうは、それぞれ違うけれども、みなそれぞれ精一杯に咲いている、お互い尊重しましょう。大事にしたほうがいい。少数だからといじめたりしない。多様はそういう事実がありますよだけで終わるような気がします。多花には「主義」をつけて、進歩主義のあとは、多花主義だといってもいいのではないかと。みんな一生懸命咲いているんだよというような意味合いを持たせてみたいと思ったんです。

【長 倉】 何かこう自然にこう生れてきて、それでひっそりとしているのが多花というふうな感じが、何ていうか、受け取り方をちょっと考えたんだけど、そうではないんですね。むしろ同じような感じの言葉で。

【片 倉】 ええ、ほとんど同じです。多様性と冷静にだけ言うのに、飽きちゃったものだから。

【長 倉】 別の意味合いを持たせよう。

【片 倉】 はい。

【長 倉】 それをみんなで愛でましょうという、両方愛でましょうということですね。そういうその心情的な。

【片 倉】 はい、今までの学問は何か理性的にというか、客観的に物を考えるということを最上にしてきたんですけれども、感性的なものも入れてもいいんじゃないかなと思ってまして。

【長 倉】 捨てられる花をそっと愛でるといってお話があったから、何かそういう感覚が少し入っているのかなと思ったんですけれども。

【片 倉】 ああ、そういうのも入っています。